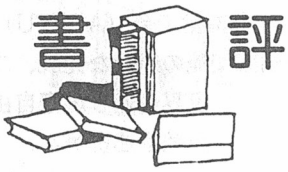
https://rodosoken.com/



小森良夫著

『「ルールなき資本主義」との闘争』

岩田 幸雄

ある高校教科書（新政治経済）が、『かつて全国組織は、総評・同盟・中立労連などに分裂していたが、1989年に連合（日本労働組合総連合）に統一された。この連合への統一を労働運動の右翼的再編成だと批判する労働組合は、同年、新たな全国組織として全労連（全国労働組合総連合）などを結成した』と記述しているように、1989年11月の全労連結成からすでに14年が経過した。我々は、当時の連合結成を労働戦線の右翼的再編であると厳しく批判した。それは全労連結成が単に連合結成に反対する「反連合組織」を目的とするものでなく、日本労働運動の再生と新たな前進、労働戦線の真の統一をめざす母体となるためのものであった。全労連「行動綱領―希望に輝く未来のために」が示すように、全労連結成は、文字通り日本と世界の労働運動の積極的・戦闘的伝統を継承し、発展させるという歴史的必然性と正当性に裏づけられたものであった。

この間わずか14年間の全労連の闘いではあるが、その到達点は多くの困難や問題点を内包しつつも、日本の労働運動100年余の歴史に一定の地歩を刻むまでに至っている。歴史的にみても闘うナショナルセンターがこれだけ長期にわたっては存在しえなかったし、また全労連排除を基本とする日本政府・財界の不当な対応にも一定の方針変更を余儀なくさせていることでもそれは明らかであろう。

同時に何よりも重要なことは、いま目の前に横たわる労働者・国民のかつてない状態悪化に全労連がどうたちむかうか、内外の期待と注目にしっかりした回答を示すために全力をあげることこそ求められている。

内外の期待に応える闘いとは、とりもなおさず『「ルールなき資本主義」との闘い』であり、民主主義的なルールを日本社会に確立することにある。

前置きが長くなってしまったが、本書は、こうした全労連運動をすすめるうえで多くの経験と教訓をもつ世界各国の労働運動の闘いを紹介しつつ、当面する課題についても国際的な視点から包括的に解明し、多くの示唆を与えてくれている。

著者は、戦後間もない旧全労連（全国労働組合連絡協議会、1947年３月）結成からの活動家であり、その後まもなく国際労働運動に携わり、プラハの世界労連本部にも常駐し、現在の全労連運動にいたるまで世界と日本の労働運動に関わられてきた我々の大先輩である。そして本書は、著者が取組んでこられたこれまでの国際労働運動研究の集大成ともなっている。著者の戦後半世紀を超える豊富な活動をふまえた高い見識は、21世紀の新しい日本と世界をつくりあげる全労連運動に対する国際的な視野からの貢献となっている。

本書は六章で構成されている。第一章は、世界の労働運動の歴史が中心である。イギリス、フランス、イタリア、アメリカの労働運動の歴史と特徴点を紹介しているが、今日の全労連も、こうした歴史的な教訓を受け継ぎ、その流れの

https://rodosoken.com/

中にあることを教えてくれている。第二章では、第二次世界大戦後の資本主義国における搾取と収奪に抗してすすめてきた賃金闘争の国際的な経験を紹介している。第三章では、日本での完全週休２日制実現と時短をめざす闘いの意義、ドイツ、フランスにおけるそれぞれの特徴をもった35時間労働実現の闘いがリアルに紹介されていて興味深い。第四章は、解雇規制と大企業の社会的責任を追及するヨーロッパの闘いの紹介である。第五章は、すぐれて今日的課題として重要な新自由主義的グローバリゼーションにたちむかう闘いである。

私自身は、本書によって、各課題ごとに示された国際的な闘いを改めて系統的に学ぶことができ、さらにその経験が今日の全労連運動にも大きく活かされていることを再確認することができた。最後の第六章「21世紀を迎えて」では、世界労連と国際自由労連が闘争方向や要求課題で接近し、共同と連帯の可能性が大きくなっているという闘いの展望についても記述されている。世界労連（WFTU）幹部や国際自由労連（ICFTU）傘下の国際公務労連（PSI）やアメリカ SEIU の幹部らとの会談・懇談など最近の私自身のささやか経験をつうじても、新自由主義的グローバリゼーションにたちむかう労働組合が国や組織の違いをこえて多くの共通点、一致点を持ち、共同の闘いがひろがっていることを実感しているところである。

ILO 総会にあたっては日本労働代表の一員に全労連を加えさせ、「中央労働委員会の労働者委員の偏向任命問題」「公務員制度改革と労働基本権問題」で全労連提訴を全面的に受入れた ILO 結社の自由委員会「勧告」を勝ち取ったこと、「第３回世界社会フォーラム」（03年１月・ポートアレグレ）や「第13回非同盟諸国会議」（03年２月・クアラルンプール）への全労連の初参加と交流、中華全国総工会（ACFTU）との交流開始など二国間交流の新たな発展、二国間交流だけに止まらない世界労連・国際自由労連の本部・傘下組織との会談や連携等々、この間の全労連国際活動にも新しい進展があった。そして国連憲章や国際法、圧倒的国際世論に反するアメリカ・イギリスによるイラク武力攻撃に反対する闘いでは、AFL-CIO 傘下組合をはじめアメリカ200万労働者を代表する労働組合で結成された反戦組織（USLAW=U. S. Labor Against the War）のよびかけにこたえた世界53カ国・200労組・１億３千万人による「国際労働宣言」への参加、五大陸の労働組合組織（ブラジル CGT、アラブ国際労連ICATU、インド CITU、アメリカ UE、フランス CGT）との共同アピールの追求、世界各国労組の反戦集会などへの積極的なエール交換などにも取組んで国内外の世論を高めてきた。

「ルールなき資本主義」との闘いが、いよいよ全面的に発展しようとしている今こそ、本書を通じて学ぶべき事柄は多い。

全労連は、労働運動総合研究所の国際労働研究部会の協力によって「世界の労働者のたたかい―世界の労働組合運動の現状調査報告―」を1995年以来毎年発行し好評を得ているが、この発行を一貫してリードしていただいているのも他ならぬ著者である。「世界の労働者のたたかい2003」ともあわせて読んでいただければ幸いである。

（新日本出版社・2003年１月刊・3200円）

（いわた　ゆきお・全労連事務局次長・国際局長）